



●相談電話(092)741-4343 24時間年中無休

「寄り添えなかった思い」

「福岡いのちの電話」評議員

友 安 潔

西日本新聞編集局総務



私以外の方が訪ねていたら、そのお母さんは愚痴の一つもこぼして気持ちが楽になっていたかもしれない。亡くなることはなかったのではないか。そんな思いを三十数年引きずっている。

福岡市内の母子家庭。重い障がいの長男を病気で亡くしたばかりだった。同じ障がいの次男の世話もあり、そのお母さんは気丈に振る舞っていた。励ますつもりで家を訪ねた。それがいけなかった。かえって気を遣わせてしまった。終始、悲愴な面持ちで、張り詰めた糸が今にも切れるのではないかと思えた。そのお母さんの訃報に接したのは数日後。過労と精神の衰弱で免疫力が低下したのが原因と聞かされた。

大学時代、私は在宅の障がい者とその親でつくる会に関わっていた。日曜学校やキャンプを企画、運営したり、家庭を訪ねたりするグループに所属していた。そのお母さんや息子さんたちも会の一員だった。

「次男を残したまま死ねない」と話していた。その言葉に緊張し、私はうまく会話を続けられなかった。心を軽くするような一言をかけられていたら、気分を転換するような話題を振っていたら、命は続いていたのではないか。力不足の自分を責めた。

他の親たちも似た悩みを持っていた。生活の全般にわたって介助が必要な人が安心して暮らせる施設は、当時の福岡市には少なかった。親たちは「自分が死ん

だ後、子どもは暮らしていけるのか」と不安を募らせていた。どの親にも気負いと焦りが感じられた。

施設の不足や制度の矛盾を指摘できても、障がい者や親の気持ちに寄り添えなかった。「おまえは何も分かっていない」。障がい者の家族にそう言われたことがある。その通りだった。

あの日、そのお母さんが心を許しているOBなり、後輩なりを連れて行っていたら、あるいは、そのお母さんが気を遣わずに相談できる窓口が福岡にあれば、救えた命だったのではないか。「福岡いのちの電話」が開局したのは、その数年後だった。



昨年、広告会社の若い社員の自殺を機に、労働者の過労自殺や過労死が目された。ただ、過労や精神の衰弱で死に至るのは労働者だけではない。厚生労働省が2015年に発表した患者調査では、躁うつ病を含む気分障がいの患者だけでも111万人を超える。孤立が深まる社会の中で、悩みを打ち明ける、困難を一人で抱え込まずに相談する、そんな相手として「いのちの電話」の重要性はますます高まると思っている。

